

お茶の時間

もみじ饅頭と

伊藤博文

編集委員長

広島に帰省した時、買って帰るお土産は、「もみじ饅頭」に決めている。

広島駅の売店に美味しいお土産がない訳ではない。最近では、カーブの名前が付いた真つ赤な包装のお土産が目につくし、瀬戸内海のレモンを使ったお菓子も評判がいい。それでも、「もみじ饅頭」に拘るのは、有名だからだ。友人に「もみじ饅頭」を渡せば、「ああ、広島に帰ってきたの」と理解してくれ、説明が要らない。

最近、この「もみじ饅頭」に有名な逸話があることを知った。初代総理大臣だった伊藤博文が娘の手を取って「何と可愛らしい。もみじのような手だろう。焼いて食うたら、さぞ美味しかろう」と冗談を言った。それで「もみじ饅頭」が出来た。

伊藤博文が娘の手を取ったのは、宮島の定宿だった老舗旅館岩惣いわそうと言われている。岩惣の女将の話によれば、明治期に4代目の女将がもみじ谷の岩惣らしいお菓子をお客様にお出ししようと、もみじの木型を作ったのは確かかなようだが、伊藤博文が助言したかどうか

かは不明である。

ただ、岩惣には伊藤博文の掛け軸が残されている。「金風、颯々として夕陽の中／閑に浜楼に倚りて晚楓ばんかに對す／勝景、由来して能く客を引く／天妃、我を留め酔い雨を残す」

試みに、伊藤公の漢詩集『藤公詩存』には、この詩が推敲されて収載されている。「金風、颯々として夕陽の中／閑に溪楼に倚りて晚楓に對す／これ樊川はんせんにあらざれどもまた愛を吟ず／天妃、我を留め酔い紅を残す」

推敲された詩は、「愛を吟じ、女神が私を留めて酔い紅を残す」となって、恋歌を思わせる詩になっている。絶景と女性に目のなかつた伊藤博文であつたと聞けば、この詩にある手を取つた岩惣の娘は、きれいな手だつたに違いない。天妃（女神）のような娘の手を取つてどう口説いたのかと勝手に想像してしまふ。

ちなみに、「樊川はんせん」は、晩唐の詩人「杜牧とく」で、「白雲生ずる処、人家あり。車を停めて坐まろに愛す楓林の晚。霜葉は二月の花よりも紅なり」という詩を吟じている。

今度、「もみじ饅頭」をお土産に渡す時、伊藤博文の逸話を付録にしてみようかと思う。全国のお土産にも面白い逸話があるかもしれない。